資料

猫疥癬虫によると思われる皮膚炎
発生の5例

初鹿 了* 三好 薫** 清水 泉太*

*川崎医科大学寄生虫学教室

(〒701-01 倉敷市松島 577)

**川崎医科大学附属川崎病院皮膚科

(〒700 岡山市中山下 2-1)

(受領: 1979年3月5日)

Five human cases of feline scabies,
Notoedres cati, infestationRyo HATSUSHIKA,* Kaoru MIYOSHI**
and Motota SHIMIZU*

*Department of Parasitology, Kawasaki

Medical School, Kurashiki City

701-01, Japan

**Kawasaki Hospital Division, Department
of Dermatology, Kawasaki Medical
School, Okayama City 700, Japan

動物寄生性の疥癬虫(ヒゼンダニ), とりわけ犬・猫に寄生する疥癬虫がヒトにも皮膚炎の被害を及ぼすことは, 従来からよく知られており, これまでにも多くの症例報告がある。

著者らが最近岡山市在住の5名(2家族)に経験した, 猫小穿孔疥癬虫(*Notoedres cati* Hering, 1838)によると思われる皮膚炎発生例は, その発現過程から推察すると, いずれも猫の飼い主の動物疾病に対する認識不足や日常的管理の不徹底に原因があると思われた。著者らは, この症例報告を通じて, 愛玩動物飼育者に動物寄生性寄生虫のヒト寄生や刺咬現象に警戒心を喚起させる必要性を感じると同時に, 人畜共通寄生虫症として, あるいは公衆衛生上からも軽視できない問題と考え, ここに本症例の概要と本邦における *N. cati* によるヒト皮膚炎症例に関する文献的考察を加えて報告する。

症 例

1. M. I., 19歳, 女. 病院勤務者. 1977年9月初旬, 腹部に痒痒性紅色丘疹の散発を認め, 近所の皮膚科医師

による診療を受けたが完治せず, そのうちに発疹が腹部から四肢・臀・背部にまで拡大したので, 9月17日に川崎病院皮膚科外来を訪れた。皮膚診察所見では, 丘疹性の発疹がヒト疥癬を思わせたので, 患部数カ所の皮膚について疥癬虫を探したが, 虫体は見いだされなかった。また, 発疹の発現部位がヒト疥癬の好発部位と若干異なっており, 孔道も見当たらないので, 動物寄生性疥癬虫による発疹を考慮して, 患者に家庭における飼育動物の有無を問診したところ, 患者は猫が大好きで, 家では猫を4頭飼っており, これらの猫は患者のベッドでよく昼寝をしたり, 患者と一緒に就寝する等のが判明した。さらに, 最近このうちの2頭が皮膚病にかかっていることもわかったので, 猫の患部に痂皮が見られたらそれを持参するよう頼んでおいた。患者は4日後に猫2頭よりの痂皮を持参したので, これを鏡検したところ, いずれにも *N. cati* と同定される虫体および虫卵が多数認められたので, この患者の皮膚炎は *N. cati* によるものと診断された。

2. C. I., 17歳, 女子高校生(症例1の妹)。9月初旬から前胸部に粟粒大の痒痒性発疹が出現し, 9月20日に外来を訪れた。受診時には, 姉と同様な部位に紅色丘疹が認められた。患者の皮膚発疹の状態からはヒト疥癬が疑われたので, 患部皮膚について疥癬虫を探したが, 虫体は見いだされなかった。問診によって, 患者は姉と同様に猫と接触する機会の多いことが判明したので, この患者も *N. cati* による皮膚炎と診断された。

3. M. I., 8歳, 男子小学生(症例1・2の弟)。姉らの発症より20日遅れて下腹部に発疹が現れ, 9月28日に外来を訪れた。受診時には, 前記の症例1・2の患者と同様な部位に痒痒性の紅色丘疹が見られた。この患者についても皮膚発疹部数カ所について疥癬虫を探したが, 虫体は認められなかった。

4. K. I., 41歳, 主婦(症例1~3の母親)。皮膚炎発生は, 家族の中で最も遅く, 9月下旬から腹部に発疹が出現した。初診の10月5日には痒痒性の紅色丘疹が体幹・両大腿・両上腕に散発していた。体幹の発疹部数カ所について疥癬虫を探したが, 虫体は見いだされなかった。

5. Y. S., 12歳, 女子中学生。初診は1977年10月7日。患者は初診の5日前から急激に発疹が体幹に出現したので来院した。患者の胸部・腹部・背部・股部には痒痒性の紅色丘疹が散発しており, 一部の丘疹には中央部に点状痂皮が認められたが, 水疱・角化性丘疹・色素沈着などは認められなかった。皮膚発疹の状態からはヒト疥癬が疑われたので, 体幹・股部の発疹部数カ所について疥癬虫を探したが, 虫体や孔道は認められなかった。

この患者についても問診により、家に4頭の猫が飼育されていることがわかったので、猫に疥癬が見られたら持参するよう頼んだ。数日後、患者は猫2頭を連れて再来したので、これらの猫を検査すると、1頭は耳介後部に、他の1頭は後足にそれぞれ猫疥癬に特有の疥癬性病巣が存在し、それらの疥癬中に *N. cati* と同定される虫体が多数認められたので、この患者の皮膚炎は *N. cati* によるものと診断された。

治療：患者には猫の疥癬症の治療を命じ、一方患者には当分の間猫との接触を避けると共に、ベーターメサゾン、*d*-マイレン酸クロールフェニラミンの複合剤（セレスタミンR）内服およびクロタミトン外用剤（オイラックスR）を使用させた。その結果、皮膚炎はいずれも約10日後に治癒し、その後再発はない。

考 察

N. cati に起因するヒト皮膚炎発生例は、外国では古くから知られている（Toomey, 1922；Rook, 1977）が、本邦では楠（1915）による4症例の記載が最初である。その後、今日までに63例の報告を見るが、その発生状況をみると、年齢別では10歳以下が6例で、10歳、20歳、30歳、40歳、50歳および60歳の各年代がそれぞれ15、6、5、9、3および2例（年齢不明が17例）で、10歳代にやや多い傾向が見られる。また、患者の性別では、69.1%（38/55）が女性で、男性はこの約1/2（17/55）である（性別不明8）。この現象は、女性の皮膚が *N. cati* の被害を受けやすいという生物学的要因のほか、愛玩動物としての猫飼育者の中に女性が多い事を示すものと思われる。

今回報告の5例中4例は、同一家族内の発症例であったが、過去の症例においても、同様に同一家族の発症例が多く見受けられる。すなわち、Ito *et al.*（1968）による一家族7名をはじめとして、小田切（1957）の6名、橋本（1956）および Ito *et al.*（1968）の各4名、楠（1915）、小林（1936）、堀（1956）および藤ら（1976）の各3名、遠山（1932）、村本ら（1939）および Ito *et al.*（1968）の各2名などは、いずれも家族発症例である。米山（1942）、岩重（1957）および金子ら（1968）の各2症例については、同一家族の発症例か否か明らかでなく、また、楠（1915）、小島（1935）、神藤（1936）、長谷川（1936）、佐藤（1938）および植村（1957）らによる報告は、いずれも1症例である。

N. cati によるヒト皮膚炎発生例は、猫飼育者に限られ、ヒトからヒトへの移行はほとんどない（佐藤, 1938）。したがって、この種の皮膚炎は猫との直接・間接的な接触によって発症するものと思われる。本症例でも、2家

庭ではいずれも猫を飼っており、ことに症例1, 2, 5の各患者は猫が好きであった。また、症例5の家庭では、患者の父母は猫が大嫌いで、猫と接触しないためか今回は発症していない。

症例1～4の患者は、猫に著明な疥癬症状が出現してから1～2週の間相次ぎ皮膚に発疹を生じているが、自己の皮膚炎が飼い猫に由来したことなどまったく知らなかった。また、症例5の患者は飼い猫の疥癬にすら気付かなかった。

小林（1936）は、本症の患者（3歳）の下腿伸側の小水疱内容中に *N. cati* の虫体を見いだしているが、多くの症例では虫体を認めていない。*N. cati* によるヒト皮膚炎の状態はヒト疥癬のそれにきわめて類似しているが、発疹好発部位の違いや虫体および孔道を認めないことでこの両種は区別できる。本症例においても最初はヒト疥癬を疑ったが、前述のごとく、発疹の発現部位がヒト疥癬の好発部位（手掌・指間・手関節屈側・女子の乳房下・男子の外陰部・下腹部・大腿内側）と若干の相異があり、さらに虫体や孔道が認められない等の理由から、動物寄生性疥癬虫による発疹を考えた。

楠（1915）は、動物寄生性疥癬虫がヒト皮膚内に見られないのは、この虫が宿主体温のわずかな違いに対して過敏性を有するためだと述べている。たとえば、比較的高体温の動物に寄生する疥癬虫が、やや低体温のヒト皮膚内に侵入できても、このわずかな温度差に適応できず虫体はすぐ死滅するという。本症例においても、患者の皮膚内に *N. cati* が証明されず、虫体の皮膚内侵入については明確に示されなかったが、患者の皮膚炎発現過程から推察すると、*N. cati* は上記の楠（1915）による宿主体温の差以外に、時にヒトを刺咬してもすぐにヒトから離れるか、あるいは単に刺咬するだけでヒトの体液は吸わないのではないかと考えられる。

出来尾ら（1978）は、最近再びヒト疥癬が増加しているので、皮膚科医は掻痒性皮疹を主訴とする患者に遭遇したときには、一応は疥癬を念頭に置くよう提言している。著者らは、この提言に加えて、動物寄生性疥癬虫によるヒトの被害にも充分留意すべきであることを強調したい。

ま と め

1977年9月から10月にかけて、岡山市在住の2家族5名に、猫小穿孔疥癬虫（*Notoedres cati* Hering, 1838）に起因すると思われる皮膚炎発生例を報告した。これらの患者の飼い猫にはいずれも *N. cati* の虫体が認められたが、患者の炎症部皮疹中に *N. cati* の虫体および孔道は認められなかった。また、本邦における *N. cati* に

よるヒト皮膚炎発生病例に関する文献的考察を加えた。

稿を終わるに当たり、ご指導いただいた長花 操教授に深謝いたします。本症例は、第33回日本衛生動物学会西日本支部大会において発表した。

引用文献

- 出来尾哲, 山崎玲子(1978) : 最近ふたたび見られるようになった疥癬。広島医学, **31**(2) : 132-138.
- 藤幸治, 森本隆芳(1976) : 人畜共通感染症に関する研究(5)。 *Notoedres cati* (小穿孔疥癬虫) による人の感染例。衛生動物, **27**(1) : 81.
- 長谷川宗憲(1936) : 猫疥癬虫による疾患。診断と治療, **23**(1) : 135.
- 橋本喬(1956) : 猫疥癬虫の家族感染例。皮膚性病誌, **66**(8) : 491.
- 堀正洋(1956) : 猫疥癬虫の婦人への感染。 *Notoedres cati* の人体感染例に就て。獣医畜産新報, **188** : 866.
- Ito, K., Y. Ito, S. Kondo and M. Otani (1968) : Animal scabies in humans. *Bull. Pharm. Res. Inst.*, **77** : 1-8.
- 岩重毅(1957) : 人体における猫疥癬の2例。医界展望, **30** : 10.
- 金子文雄, 平山晃也(1968) : 猫疥癬虫による皮膚炎の2例。日皮会誌, **78**(7) : 649.
- 小林敏夫(1936) : 猫疥癬虫の人体感染3例。體性, **23**(7) : 466.
- 楠太(1915) : 猫より伝染せる一種特異の疥癬。皮膚泌尿器誌, **15**(8) : 639-641.
- 小島理一(1935) : 猫疥癬の一例。皮膚泌尿器誌, **38**

(3) : 564.

村本剛太郎, 石野常人(1939) : 猫疥癬症の一例。皮膚と泌尿, **7**(3) : 308.

小田切久夫(1957) : 猫疥癬虫の人体感染例。日皮会誌, **67**(8) : 576.

Rook, A. (1977) : Animal scabies in man. *Recent advances in dermatology*, **4** : 73-88.

佐藤勝(1938) : 猫疥癬症例。體性, **25**(3) : 131.

神藤秀雄(1936) : 猫疥癬の一例。皮膚泌尿器誌, **40**(3) : 522.

Toomey, N. (1922) : Scabies of animal origin. *Urol. Cutaneous Rev.*, **26**(8) : 473-489.

遠山郁三(1932) : 人体における猫疥癬。皮膚泌尿器誌, **32**(11) : 1124.

植村隆(1957) : 猫疥癬。臨床皮膚泌尿, **11**(8) : 図譜.

米山士朗(1942) : 猫疥癬症例追加。皮膚性病誌, **52**(2) : 160.

Summary

Five human cases involved in two families infested with feline scabies, *Notoedres cati* Hering, 1838, were reported. Notoedrosis in the present patients had its source in scabby cats kept as an animal pet. The eruptions observed on the skin were diagnostically similar to those of human scabies caused by *Sarcoptes scabiei*, but no mites nor scabby tunnels were found in the skin of the patients.

Human cases of feline scabies infestation in Japan were also discussed.